

暗殺教室妄想記 『再会
の時間』

A0イ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

野外学習に来ていた潮田渚とその生徒。

彼らがそこで出会ったのはもう一人の指導者だった。

目次

暗殺教室妄想記『再会の時間』 | 1

暗殺教室妄想記 『再会の時間』

「渚!!」

「ん、ん〜」

「くオら渚ア!!」

「は、はいッ」

「なア〜に幸せそうに居眠りこいてんだ。テメーが野外学習やりたいつつーから付き合つてやってんだろーが」

「ゴ、ごめん。今行く!!」

今日僕は生徒を連れて思い出の詰まったこの山に来ていた。

相変わらずの大自然。今の時代この付近でこれだけの自然が残っている場所はとても貴重だ。凶鑑でしか見られないような生き物がここにいらるかもしれない。

僕は自分が先生にそうされたように、生徒にはできる限り本物を見せてあげたいと思ってる。それにここの空気を吸って学んでも欲しかった。聞こえるのは木の葉がこすれる音と鳥の声だけ、空気は澄んでいて、木陰は気持ちが良い。ここは本当に学ぶのに適している。

だけど一つ、不安なことがこの山にはあった。

「ああ？不審者？」

「うん。先週見たつていう目撃情報があったんだ」

それはグループラインでの岡野さんからの

《昨日いつものように練習してただけど……なんか知らない人がいて、怪しかったんだよね》

と言う報告だった。その後も情報を聞いて、みんなで話し合った結果は

【危険性はなさそうだから様子見】

本当はすぐにもでも警察に連絡をした方が良いのだろうけど、なるべくこの山には知らない人を入れたくない。騒ぎの中心になってほしくないというのがみんなの気持ち^想だった。7年前……あんなことがあったんだから、そう思うのは当然だ。

「てかよ、先週つて俺らがここに初めて行った時じゃねえか！平気なのかよ！」

「う、うん。昼間だし……それにここは広いから出会ったりは——」

「特徴は？」

「特徴は……全身黒の服装だったつて」

「俺らと一緒にやねえか！もつと他に、なんかいないのかよ」

「うくん髪を染めて——」

「だからそれも俺らと同じだろうが！他にそいつだってはつきり分かるもんは！」
「いい、以上かな」

頼りない僕を囲みながらみんなが拳を鳴らしてウオーミングアップをしている。僕は「いつものが始まる」と思いながらスイッチを入れようとした。けど

「――なあお前ら、その不審者つての俺らで捕まえね？」

太い木の枝に座っていた紫龍くんの、僕らを見下ろして言ったその一言で皆は拳を鳴らすのをやめた。紫龍くんはこの教室では一番の優等生だ。それは僕が来る前からだった。だからつまり優等生つていうのは……「力がある」つていう意味。

この教室は動物の群れのようにシンプル。力があれば誰でも言うことを聞くし、誰でも好意的に接してくる。逆に力がなければ……この教室じゃあ生き残れない。でもそれは僕が来る前までの話だから、今はその動物の群れのような仕組みも少しずつ変わってきてる。

それなのにだ。それなのにみんな

「おー！良いな！虫なんか捕まえるよりかよっほど楽しそうだ！」

紫龍くんの言葉で意識が変わる。けどこれは命令されて渋々という感じではなくて、みんなが紫龍くんをリーダーとして尊敬してるって感じだと思う。だから僕としては少し悔しい。

「待ってよ紫龍くん！今は授業中！それに危ないよ！」

「は？俺らがせっかく社会の役に立とうとしてるのに何？ナギ先はそれをやめろって言うの？」

こうやってどこかの誰かさんの昔のような、ズルい言い方もする。その辺りから察するに彼は頭が良いと思う。勉強はまだ教えたばかりだからなんとも言えないけど、頭がキレルのは間違いない。いや、ズル賢いのかな？喧嘩も強いし、髪の毛も派手な紫で、見れば見る程、あの彼のように。でもこの子はまだ、顎が上を向いている。

「そ、そうじゃないよ。僕はただ……」

紫龍くんは枝から僕の前に飛び降りると首を上げて僕を見下していた。こんな彼は、なんて言ったら納得してくれるのだろう。不審者を捕まえるなんてダメだよ。常識的にアウトだよ。ましてやそれを担任が許可するなんてさ。生徒が危険な目にあつたら最悪だし。でもなんて言ったら……教師としてなんて言ったら正解なんだ？

『本当に自分はベストの答えを教えているのか内心は散々迷いながら、生徒の前では毅然として教えなくてははいけない。決して迷いを悟られぬように“堂々”とね』

突然、頭の中に声が流れた。

空、耳？違う。声だ！

何度も聞いたことあるような……懐かしい声。きおく

そうだよ。僕は先生なんだ。皆に見られて、皆んなに注目されて、頼りにされる存在なんだ。このくらいでおどおどしてどうするんだ。

「ただ？何だよナギ先早く言えよ！」

「僕はね、虫を捕まえられないみんなにはレベルが高いんじゃないかって、心配なだけだよ」

結果、OKを出してしまったのかな。でもみんなの目がやる気に満ちてるんだ。危険な目に合いそうだったら僕が彼らを助ければ良い。

そのためにも僕はいるんだから。

「っ！言ってくれるじゃねえかよ！やってやろうぜお前ら！」

紫龍くんが拳を掲げるとこれまで聞いたことないような大きな声と、見たことのない団結した様子で皆は雄叫びを上げた。

「ナギ先。もし俺らが不審者を捕まえたら明日の授業休みにしてくれよ」

「……良いよ。けど、捕まえられたらね」

「こんなの普通の先生だったら許可しないよね。それも合計二回も。でも僕の恩師もだいが、普通じゃなかったからね。」

――
俺らのこの大切な山に来る不審者ってのはどんな奴かね。顔を拝むついでに捕まえて……どうしてやー

足音？集団で来てる。ざつと十人か。黒の学ラン。似合ってない髪色。不審者ってどう見てもあいつらのことじゃん？

でもあれって高校生っぽいな。だけど見たところあまり優等生には見えない。ここを溜まり場にしてゴミとか散らかされて、火事とかになったらシャレにならないし、今のうちに掃除しておこうか。

俺一人で来て正解だった。ちよつと最近理不尽と戦いすぎて疲れてき、楽しめなくなってきたとこだから、たまにはこうやって自分に自信をつけないとね。

「ねー君たち。高校生？こんな山で何してるの？」

「誰だあいつどっから来やがった」

「紫龍あいつって」

「黒いスーツに赤髪。どうやら俺らの探してたモノっぽいな。刃山」

紫龍は首で隣にいた刃山に合図をした。

「捕まえろ！ たった一人……だ」

7秒。

刃山がそう命令してから紫龍の顔が絶望に変わるまでにかかった時間である。

たった一人の赤髪の青年に突っ込んでいった黒い十人は、たった一人の彼に倒され土の上で横になっている。

カルマは4秒で全員を倒した。突っ込んできた先頭の二人の頭を掴み衝突させた。その時後ろに回っていた三人の一人には躊躇なき頭突きをし、両サイドの二人は、彼らの顎を下から手のひらですくい上げ脳を揺らした。ここまでで2・7秒。残りの1・3秒は同時だった。同時に残りの五人を一瞬で土の上に寝かせた。ただその時にカルマは、彼らに直接手を触れていないのだ。彼の手がその時に触れたものと言えば、自身の手の平と手の平である。神に祈るようなポーズをしたら五人が倒れたのだ。

ーちなみに、残りののは3秒の内訳は……この有り様を見ていた紫龍が事態を飲み込み、理解するのにかかった時間である。

「アツレ？君たち俺と喧嘩する気？俺もうそういうガチのはしないんだけど」

なくんて。高校生相手にいくらなんでもこれはちよつとやりすぎちゃったな。けどこんだけ痛い目を見ればいくらバカでも、さすがにもう山には来ないでしょ。

それでも来ちゃうような変態は俺が遊んであげるけど。

「……刃山お前はナギ先呼んでこい」

「お前はどうぞすんだ」

「ナギ先の目の前で捕まえてやるよ」

ん？ なぎせん？ ナギ先？ ナギ先生？

《今の実習先の生徒は荒つぽくてさく。僕カルマに喧嘩習っておけば良かったよ》
なるほどね……面白いじゃん。

「残った君、一人でなんとかなるって思ってるの？」

「あんたがただの不審者じゃないのは分かった。けど、そこに倒れてる奴らが弱かったとも言える」

「ふうん。君はこいつらのことなんだと思ってるの？」

「別になんとも」

「凄^{まじ}いなくまるで君は特別だ」

「まるで？ 真実だろ！」

この生徒のさつきから顎を上げてポケットに手を入れて話す姿が気に食わなかった。こいつのその態度がとかじゃなくて、なんだか昔の俺を見てみたいだったから。

「何かスポーツやってた？」

ふう。速い速い。このパンチなら確かに敵なしだ。でも速いって言っても、マツハ20よりは遅いんだけどね。

それに、

「な〜んだ喋る余裕もないの？」

パンチをするだけで一杯一杯になつてる。荒いんだよね。無駄な動きが多い。あと肩に力入りすぎもつとこうさ〜、

「避けてばかりのヤツが言つてんじゃねえ！」

「じゃあ……当ててみよつか？顔面良い？」

背中^{モーション}の筋肉を使つて殴りなよ。

「っ!？」

目つき、声、動作。カルマの槍のように突き出された拳は本物だった。だが彼は、紫龍が目を瞑つた瞬間、手を下ろした。最初から当てる気があつたのか、なかつたのか。あるいは彼への慈悲か。それとも彼が成長したからか。

「殴るわけないじゃん」

カルマが尻餅をついて倒れている紫龍の手を握つて起こそうとしたその時、紫龍は握りしめていた砂をカルマにかけた。砂は固まっていたので団子^{モーション}のようになった状態でカルマの前髪に当たつた。

「テツメええ！俺が高校生だからって舐めてんのか！俺はそういう大人がいつち番腹たつんだよ！」

紫龍は立ち上がって砂を払って下を向いているカルマに言い放った。

大声を出した後、呼吸を整えた紫龍は我に返りかけていた。その時やっと、自分がカルマにしたことに気がついた。彼は恐怖を感じていた。次に顔を上げるカルマの顔はどんな顔だろう。紫龍の頭の中は怒りに満ちてルビーのように真っ赤な目をしたカルマしか浮かばなかった。

だが顔を上げたカルマの顔がそんな顔ではないということとは声で分かった。

「……その気持ちス〜ゲ〜分かる。だから俺、今から君と対等でいくけど先生にチクったりしない?」

「なんだお前そんなことビビってんのかよ」

「だって君たちの先生がもし怖かったら俺やだもくん」

「俺らの先公?ただのチビだよ」

――

「起きろ渚!!」

「は、はいッ」

「お前授業中に寝るとかそれでも先生かよ!」

「ほんとごめん。ただこの山って凄い落ち着くんだよ。刃山くんも寝てみない?」

「それどころじゃねえんだよバあか！早く来い！不審者が見つかったんだ！」
「す、凄いじゃん！」

褒めて良いのかな。でも見つけたのは凄いよね。

「ヤベえ……んだ」

彼らの「やばい」は何度も聞いてきた。けど今のやばいは怯えてた。彼らがこんな
に怯えているのは初めてだ。

僕は最悪の事態を想定して聞いた。

「どうやばいの？」

「殴りかかったみんなを一齐に気絶させたんだ！今は紫龍が一人でー」

みんなを気絶……紫龍くんが一人で……。

顔に出すなよ僕。先生はどんな時でも堂々としなきゃダメだから。

自分の生徒が本物のナイフで決闘をしても、自分の生徒が未知のウイルスに感染して
も、自分の生徒が自分を殺そうとしても決して動揺を見せてはいけない。堂々とするん
だ。そうすればみんなも落ち着くから。

「落ち着いて刃山くん。僕が一緒に行くから」

――

「もうやめたら？」

「……やめねえ」

血の痰を吐いた紫龍の学ランは土が染み込んでいた。一方カルマは彼らの前に出た時と何ら変わらない。スーツは抜いでいたがシャツのボタンは外さず、ネクタイも緩ま
さず、袖もめくっていなかった。

「そのやる気は凄いいけど、今の君じゃ俺にはその拳を当てられない」

「なんで、そう、言い切れる」

「なんで？それは俺の方が君よりも技を持つてるから」

「技……だと？」

「君の力は君の世界じゃ特別だろうね。けどそんな拳だけの力なら持つてる奴は大勢
いる」

『刃を研ぐのを怠った君は暗殺者じゃない。錆びた刃を自慢げに掲げた、ただのガキ
です』

「君はさ、そこで今も倒れてる奴らと何も変わらないんだよ」

「……るツセえええ！」

「君も一度完璧な敗北を知った方が良く。それが君を強くするから」

「負けて何が良いんだ!! かつこ悪いだけだろうが！」

「まづさ。そうやって顎を上げるのやめなよ。アッパー入れるよ？」

この状況でもなお紫龍はカルマを物理的に見下していた。それは彼のプライド。に見せかけた幼い人間が持っている何か。その何かもろともカルマの下から迫る拳が打ち砕く。よりも前にカルマの上を向きかけていた顎に、女性のように華奢な人差し指の腹が触れていた。

「——カルマ。君も、ね」

カルマは名前を呼ばれた瞬間「殺される」と、死を感じた。そこからの彼の回避行動は見事だった。自身の体重を一気に足に乗せ、後方へと跳んだ。

だが実際、声をかけられた時点で気がついては手遅れである。なぜなら言葉よりも先に、渚の手は彼の顎に触れていたのだから。

「渚!」

いつの間に……こんなところに誰か来たら分かるのに。目の前に来ても気がつかなかった。ちよつと熱くなりすぎてたか。

「大丈夫か紫龍!」

「バアかが刃山。捕まえないきや意味ねんだよ」

「紫龍くんその怪我は……」

紫龍くんの制服はボロボロ。口元には血が付いていた。さつきカルマは紫龍くんを

殴ろうとしていた。でもそんなこと。今のカルマがそんなことするわけー

「木から落ちたんだよ」

「えっ、木から？大丈夫？ちよつと見せて」

「さわな！キモいんだよ！」

うっ……キモいは心に刺さるよ。僕、キモいは言われ慣れてないから。

「あれ〜？今度は中学生？ダメだよこんなところに来ちゃ」

「ただ、見た目が幼いってバカにされるのはもう慣れてるんだよ。君のせいおかけでね。

「何バカなこと言ってるのカルー」

「やろうよ。この場所で。あの時のリベンジマッチを受けてよ！」

あの時。ああ、あの時ね。そういえばちようどこんな風に開けたところだったけ？いや、もしかして本当にこの場所かも。あそこから飛び降りて四人を倒したんだっかな。

「良いよ。やろう」

「良いね〜その目。百獣の王みたいな動じない目！」

いつかの小動物のメスはオスのライオンになつていた。

「渚、あいつ何言ってるんだ。リベンジマッチ？」

「――二人とも、みんなのこと任せて良いかな？」

「……良いけどよナギ先。あいつはお前の何なんだよ」

「それは明日の授業で話してあげるよ紫龍くん」

「ツチ。みんなを起こすぞ刃山」

赤羽業：身長185センチ体重70キロ

潮田渚：身長160センチ体重48キロ

背があるということはそれだけ射程リーチがあるということ。

体重があるということはそれだけ威力パワーがあるということ。

体格が違うということはそれだけの差があるということ。

そしてその差とはこの場合……戦闘力の差である。だからボクシングやレスリングなどの肉からだ体と肉からだ体で戦うスポーツでは公平性のために階級というものがあるのだ。だがこの二人はボクサーでもレスラーでもない。二人は、元暗殺者アサシンである。

純粋に力と力を比べたら絶対に俺が勝つ。そんなのはあの不良たちでも分かる。けど今の俺が今の渚をあの時のように殴ったら警察に捕まる。あの時はクラスメイトという関係、そして教師公認の喧嘩だったから何しても平気だった。じゃあどうしようね。どうやってリベンジをしようか。

って、俺はたまに考えることがあった。やっぱりあの時負けたことが悔しかった。別に自分の意見が通らなかつたことは大して悔しくないのに、渚に勝負で負けたことが悔

しかったんだよね。でね、渚。俺見つけたんだよ、そのリベンジの仕方。

「渚。俺、出来るようになったんだよ。これ」

渚へのリベンジをするにはやっぱり殺し屋の技で勝たなきやだめだと思った。^{スキル}

彼の最高の刃、才能を凡人の俺が上回ったら俺の勝ちを誰もが認める！

カルマは僕の前に歩いて近づいた。僕に借りたノートを返すように。普通に……猫騙しの構え!!?

見よう見まねだし俺は渚みたいに人の心の波なんて見えないから渚のとは違う。俺の場合は俺の力で力尽くまで相手を圧倒させる技。

さつきはこれで一度に五人を倒した！ これだってピンチを脱する殺し屋の技で良いでしょ!?

両手を広げて、空気を掴んで一気に！ ぶつける！

＃!!バンツツ!!＃

爆発!? 何かがカルマの手の中で破裂した。その音は僕を襲った。頭を鈍器で殴られたようにぐらつと……ぐら……つ……と

「意識はあるのに立てないでしょ渚? これやった俺でも頭クラクラすー」

「……てるよ。僕は立てるよカルマ」

俺の必殺技を直撃したはずの渚が俺の目の前で転んで起き上がるみたいに立ち上

がった。さつきくらったやつは何分も倒れていたのに。何で？

「もしかして耳栓？」

「そんな、殺せんせーみたいな器用な対策僕には出来ないよ」

「じゃあなんで」

「生徒が見てるから、カツコ悪い姿は見せられないからだよ」

冗談かと思つた。けどそう言う渚の顔は照れながら微笑んでいた。これは冗談を言つて、見に合わないことを言つて恥ずかしがつてる顔じゃない。これは渚の普通の笑顔だ。本気でそう言ってるんだ。本音を言つて照れてるだけ。

「何それ、ズルくない？」

「ズルいのは僕たちの先生もそうだったでしょ？」

『カルマ君。自らを使った計算ずくの暗殺お見事です。音速で助ければ君の肉体は耐えられない。かといつてゆっくり助ければその間に撃たれる。そこで先生ちよつとネバネバしてみました。これでは撃てませんねえヌルフフフフフフ』

「違う。俺たちの先生はズルいのが日常^{デフォ}だった。

「先生はさ、生徒の前なら力が湧くんなんだよ」

「ならやりなよ必殺技。今度は渚の番」

「やらないよ。もしここで無抵抗なカルマを倒したら僕は先生として死ぬ^{失格}だからね」

ま、やっぱり俺の考えなんて渚はお見通し、か。

「何だろ。こつちでもダメか〜」

「ダメって、カルマは危ないな。僕の事、恨んでるの?」

「だったら最初から殺しにいつてるよ」

カルマは右手を差し出した。瞬間頭に鮮明で蘇るあの時の記憶。

僕を起こすためのものだったあの時の右手。それを僕は今、立ったまま握った。

「じゃあね渚」

「えっもう行っちゃうの!?!」

「不審者なんていなかった。いたのは変わった先生とその生徒ってみんなに連絡しと

くよ」

「ばいばい。またね」

熱の残る右手で手を振ってカルマを見送った。けど彼は数歩進むと、首をこちらに向
けかけて止まった。

「あ、そのしりゆーって子。その先生チビだけど、怒らせない方がいいよ。殺される
からね」

背中を向いたままカルマは踊った声で言っていた。紫龍くんと何があつたかは知ら
ないけど、珍しく紫龍くんが顔を上げて人の話を聞いていた。

「良いのかよ渚あいつを逃して」

「うん。きつとまた来ると思うよ」

「はア!?それってダメじゃねえか!」

「大丈夫。彼は、僕の親友だから」

「おまけの時間」

《不審者の件だけどあれ、渚とその生徒が野外学習に来てただけだったよ》

と言うカルマのメッセージをきっかけに

《渚! そうやって俺たち以外をあの山に入れる時はちゃんと連絡するって山を買った時約束したろ!》

《俺、真面目に警察に電話しようかと思つたぜ》

《あのせいでしばらく山で練習できなかつたんだよ》

《私も虫取りツアー中止にしちやつた……》

《正義は仕事しろ》

《なぎさく。そんな風にみんなとの約束守れないと男としてダメだと思ふな》

《俺も撮影場所に使いたかつた》

《なんか俺も一言イトナに言われてるんだけど(――)》

僕はみんなから集中砲火を浴びた。けど内心は久しぶりにみんなと話せたみたいで

嬉しかった。

文字だけだと怒っているように思われるかもしれないけど僕にはその文字の奥に、笑いなから肩を叩いてくるみんなの姿が見えた。

……ここまでは良かったんだけど

《で、でも本当に不審者じゃなくて良かったよね！》

と、茅野が言ってからみんなの顔が悪いことを考えているカルマの顔に見えてきた。

《お前ら、茅野さんが来たからもうその辺にしてやれよ》

《茅野さんに言われたらしようがないな》

《茅野さんの前じゃ私何も言えないわ〜（笑）》

《もーもう！皆そういうのやめてよ！》

茅野はそう言ってたけど僕にはその意味がよく分からなかった。あと、みんながそういう風に言ったことも。茅野が芸能人だからってことかな？

とりあえず「茅野が昔よりもイジられキャラになっていた」っていうことは分かった。おわり